●選評

小島なお

・松下　誠一（東京都）

乱雑な意識の中で薙ぎはらう
月の明かりもドーベルマンも

無秩序な意識のなかで薙刀のように腕を振る。月の明かりもドーベルマンもつよく美しく倒されてゆく。倒されてなお誇り高いその残骸の先にあるものは。

・立花ばとん（東京都）

イヤホンジャック
イヤホンジャック月の宴

ジャックは差し込み口のこと。けれど、繰り返される乱暴な濁音のひびきは占拠や乗っ取りを連想させる。人間の存在しないこの夜の宴の無音のざわめき。

・うずたろう（埼玉県）

甲を撫で沖へ帰っていく波を
蛍光ピンクで囲っておく

足の甲を撫でられたそのときから私と波のあいだには約束の関係が結ばれる。守れない約束だとしても、覚えておけるようにマーカーで印を付けておく。

・小林奔（神奈川県）

人生は全員の中にあるらしい

キモいけど歴史それでも歴史

自分の人生だけでも、こんなにグロテスクなのに。人類史が始まって以来、その途方もない重荷を誰もがぶら下げているなんて。歴史はすべて黒歴史である

・ベロニカ（神奈川県）

白墨を食べてあなたを騙しても

オオカミがチョークを食べて声を良くしたのは、子ヤギを食べるため。それで、私はあなたをどうしようというのか。丸呑みぐらいできないと割に合わない。

・翠（東京都）

カーテンは

かなしいことを

うらなえる

わたしを巣立つ子の

数などを

かなしいことを占うなんて、と思うけれど。かなしいことでも、たぶんみんな知りたい。むしろうれしいことよりも知りたいんじゃないのかとさえ思う。

・藤色（京都府）

雨の日の唐揚げのじゅわ

雨の日のそこらじゅうの湿度のなかで、唐揚げの「じゅわ」だけが、あけすけに

からりとしている。唐揚げの持つ得も言われぬ求心力。

・白野（新潟県）

何しても割れてしまった花瓶かよ

不注意で落としてしまった花瓶。怒りにまかせて投げつけてしまった花瓶。どんな道を辿っても結局、花瓶は割れるしかない。定型を揺らす「かよ」の口ぶり。

・まちりこ（埼玉県）

嘘になる前に手に取る蝸牛

嘘になってからではもう遅い。その前にすばやく、そして慎重に、たしかに手に取ることが秘訣だろう。動いていないようで、蝸牛はすぐに見えなくなる。

・折田　日々希（神奈川県）

父親が

高野豆腐を

日没のように食べてて

雨に似る箸

いまにも破綻しそうで、危ういところで保たれている綱渡りのようなふたつの比喩。歳月とは、下へ下へと重心を移してゆく力のことだろう。